



特集

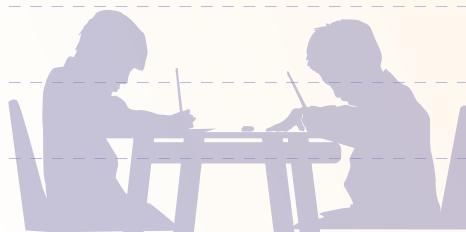
「小6 統一合判」3

中学入試レポート vol.

どうなる2019年入試？

最新の志望動向から探る 入試予測と併願校選びのポイント

6年生の統一合判テストもこれで3回目。大勢の仲間が集まって力を競う、こうしたテストの雰囲気や形式に、ようやく慣れてきた受験生も多いと思う。来年2月の入試本番まで残り5か月足らず。いよいよこれからが、入試に即した実戦的な力を身につける段階だ。一方で保護者の皆さんは、わが子の受験校を固めていく時期になった。そこで今回は、この9月までに明らかになった志望動向を踏まえて、来春2019年の入試状況をできる範囲で予想しながら、併願校選びのポイントをお伝えしていこう。



首都圏模試センター

7月小6「統一合判模試」受験者数は3%増。 2019年入試の受験者数は5年続きで増加へ！

最初に、来春2019年首都圏中学入試の動向を予測するうえで、模試の受験者数の変化を見ておこう。先の7月に行われた小6第2回「統一合判模試」の受験者数は、計12,218名（男子5,840名、女子6,378名）で、昨年7月の受験者数11,851名（男子5,561名、女子6,290名）に対して103.1%に増加している。他の大手模試の受験者数も増加傾向にあり、この動きを見る限り、来春2019年首都圏中学入試の受験者数は、5年続きで増加する可能性が大きくなった。

そうしたなかで、すでに夏休み前までに、来春2019年入試に向けた各校の入試改革・学校改革の動きが、かつてないほどに数多く伝えられている。最難関校の動きは少なく、一つひとつの動きの影響はさほど大きくないものの、それらの動きを考え合わせると、入試の全体状況にも影響を及ぼすような、大きなうねりとなることが予想される。今回は、そうした動きが及ぼす影響を見ていこう。

最難関校への強気のチャレンジ傾向。 有名大学付属校の多くも人気増加か！！

今春2018年入試では、開成や栄光学園、慶應義塾普通部、早稲田、早稲田高等学院、桜蔭、女子学院など、首都圏の最難関私立中の志願者が増加した。2～3年かけて進学塾で4科目を勉強してきた成績



今春2018年2月1日の開成中の入試風景。多くのマスコミ取材も！

上位生の多くが、高い目標に向けて強気でチャレンジした結果、最難関校の志願者が増えるという傾向が見られたということだ。来春2019年入試でも、おそらくこの傾向は引き継がれることになるだろう。

一方で、今春2018年入試では、慶應義塾大学、早稲田大学をはじめ、MARCH 5大学、学習院大学、日本大学、東海大学など、有名大学の附属中学校の多くが志願者を増加させた。「2020年大学入試改革」を2年後に控え、中学受験時から大学付属校を好む傾向が目立ったのである。

この「大学付属校人気」は、この2～3年続いてきた傾向でもあるが、来春2019年入試でも引き続き同様の傾向が見られることが予想される。

一見すると矛盾するような上記の傾向ではあるが、現在の中学受験生と保護者の多様な志向を反映したものともいえるだろう。

とくに「大学付属校人気」は、慶應義塾大、早稲田大など最難関私立大学はもちろん、明治大、中央大、学習院大などの準難関大学から、日本大、東海大などの中堅大学の付属校にも及んでいて、最近の中学入試におけるひとつの潮流となっていることに注意しておくべきだろう。

男女とも人気校が午後入試を新設。 「算数1科目入試」が大きなトレンドに！

ここからは、7月までに公表された各校の入試改革（入試要項変更）や学校改革の情報から、来春2019年入試で予想される人気動向を見ていこう。

ひとつの大きな動きが、男女ともかなりの人気校が、「午後入試の新設」に踏み切ったことだ。

女子校では香蘭女学校（東京・品川区。女子校）が2月2日の午後入試を募集定員60名、国・算2科目で新設。年によって若干の志願者の増加はあるものの、この10数年、ほぼ安定して高い人気を保ってきた香蘭女学校が、午後入試を新設するニュースには驚かされた。

これまでは、2月1日の香蘭女学校を第1志望にす



る受験生が、この日の午後や翌2月2日の午前・午後
の入試で、他のミッションスクールを併願するケ
ースが多かったが、同校の2月2日午後入試新設によ
って、逆に2月1日のミッション系女子校（女子学院、
東洋英和女学院、立教女学院、頌栄女子学院など）
との新たな併願パターンも生まれることになる。ま
た、これによって影響を受け、人気を奪われる学校
（とくにミッション系女子校）も出てくるだろう。

また、同じプロテスタント系女子校の普連士学園
〈東京・港区。女子校〉も、2月1日午後「算数1科目」
入試を新設する。こちらは2点×50問、100点満
点で、試験問題は計算問題と一行題だけの構成とい
う出題形式で行われる点がユニークだ。すでにサン
プル問題も公表されている。

同じくミッションスクールではあるが、カトリッ
ク系の晃華学園〈東京・調布市。女子校〉も来春は
2月1日に午後入試を新設。こちらは募集定員30名、
国・算の2科目入試で行われる。

さらに、山脇学園〈東京・港区。女子校〉も2月
1日に午後入試を新設する。こちらは「国語か算数ど
ちらか1科目入試」という選択型で、募集定員は40
名（国語20名・算数20名）で行われる。

男子校では、世田谷学園〈東京・世田谷区。男子校〉
が、2月1日午後「算数（1科目）特選入試」を新設。
算数1科目入試であることに加え、募集定員30名の
うち20名が特待生とされている点が注目される。

同じく男子校の巣鴨〈東京・豊島区。男子校〉も2
月1日午後「算数選抜入試」を新設。募集定員は
20名で行われる。6月末になって公表されたニュー
スだけに、この9月以降に注目が高まりそうだ。同
校は2016年に新校舎が完成。元の校地であった現
キャンパスに恵まれた教育環境を整えたこともあり、
再度人気上昇する可能性がある。今春2018
年入試では3回目入試を新設したことに続き、来春
2019年入試では計4回目入試となり、受験できるチャ
ンスが増えることに注目したい。

このほか穎明館〈東京・八王子。共学校〉も2月
2日に午後入試を新設する。

さらに、埼玉でも栄東が、1月18日の東大Ⅱで「算
数1教科型入試」を新設することを公表しており、
他の私立中の算数1科目入試の前哨戦としても人気
を集めることが予想される。

激しい入試改革の動きのなかで、 わが子の強みを生かせる併願作戦を！

人気の女子校にはこのほかの動きもある。

東洋英和女学院〈東京・港区。女子校〉は、2回
目にあたるB日程の入試を、来春は日曜日にあたる
2月3日避けて2月2日に前倒しする。プロテスタ
ント系女子校である同校は、従来から日曜日には入
試を実施しない方針で、これまでB日程が日曜日と
重なる年には、翌4日に行ってきたが、来春2019
年には、これを前日に変更。日程を前倒しにした。

また、大妻〈東京・千代田区。女子校〉は、来春
は2月5日に第4回入試を新設する。募集定員は40
名。後半戦である2月5日にあえて入試を新設した
狙いは「タフな受験生に（後半でも受験できる）チャ
ンスを与えたい」ということだという。

ここまでお伝えしてきた動きのほかにも各私立中
の改革は数多くあるが、これらの動きのなかでも、
「午後入試の新設」と重なる「算数1科目入試の新設」
の動きは、来春2019年入試における“新たなトレ
ンド”となっていることに注目したい。

こうした2月1日・2日の午後入試の新設、算数1科
目入試の新設、2回目入試の前倒し、後半戦入試の



来春2019年入試では2月1日午後
に「算数選抜入試」を新設する巣鴨中。

新設といった一連の入試改革が、かなりの人気校にも続出てきたことは、中学入試における私立中どうしの受験生（志願者）獲得競争が激化したことを物語るものでもある。

ということは、逆に受験生と保護者にとっては、上手な学校選びと受験作成（＝併願作戦）を立てることさえできれば、こうした激しい変化のなかに、合格へのチャンスが広がるという見方もできる。たとえば「算数が飛びぬけて得意」な受験生にとっては「算数1科目入試」は、その強みを生かせる機会となり、「国語が得意」な女子受験生にとっては、山脇学園の「国・算どちらか1科目選択」の午後入試もひとつのチャンスとなるはずだ。

そうした「わが子の学力特性＝強み」を生かせる受験作戦が上手に立てられるよう、最新の入試情報を正確にキャッチして、しっかりと併願を考えていくことが大切になるのだ。

公立中高一貫校にも「IBスクール」が誕生。「21世紀型教育」への期待もさらに高まる！

これまでお伝えしてきたような入試改革によって、受験生の獲得競争が激化する一方で、来春2019年入試では新たな動きも生まれている。それが、いわゆる「21世紀型教育」など、世界標準ともいえる新たな教育を標榜する学校の誕生だ。

その象徴が、首都圏の公立中高一貫校としては初めての「IB（国際バカロレア）スクール」としてさ

いたま市に新設される、さいたま市立大宮国際中等教育学校（母体はさいたま市立大宮高等学校。新キャンパスに新校舎を建築中）だろう。

同校のWebサイトに掲載されている「学校案内」のリーフレットの内容は、ほとんどが「IBプログラム」のコンセプトを中心としたもので、適性検査のサンプル問題には、すでに英語の出題も含まれている。公立学校もここまで思い切って新たな教育を導入する時代になっているということだ。

同校を受験できるのは、さいたま市内の小学生のみとなるが、首都圏初の公立中高一貫校の「IBスクール」が誕生することの影響は、小学生の保護者の「教育の変化」への認識を新たにするという意味で非常に大きなものになるだろう。同校がどこまで高い人気を集めるか注目される。

一方の私立中でも、たとえば来春2019年から中学が共学化して校名も変更される武蔵野大学中学校（現・武蔵野女子学院。東京・西東京市。女子校）などの思い切った教育改革が注目される。

同校は、大阪府立箕面高等学校の校長として、着任から3年間で「海外大学への合格者を20名輩出」という成果を出して注目された日野田直彦先生を、今春から新たな校長に迎え、「グローバル&サイエンス」をキーワードに、世界に通じる力を育てる教育を展開するという。高校は2020年から共学化する予定で、今後どこまで教育展開と成果が様変わりするか、大いに注目される。

ドルトン東京学園（東京・調布市。共学校）は、「ドルトン・プラン」による教育を実践する日本では初めての中高一貫校として、現在、調布市の新キャンパスに新校舎を建設中だ。数年前までであれば、こうした新しい教育を導入する私立中が開校初年度から高い人気を集めることは予想しにくかったが、現在の大きな“教育の転換期”に、ドルトン・プランという世界に広がる教育プログラムに注目する小学生の保護者も増えているようで、説明会などにも多くの参加があるという。

埼玉県では、来春2019年から中学校が新設され



首都圏模試主催セミナーの講演で、新たな参加者に語りかけた武蔵野大学中学校長の日野田直彦先生。



る細田学園（埼玉・志木市。共学校）が、「dots（原体験）教育」という新たなコンセプトで中高一貫教育に踏み出す。「Making dots（最高の原体験を得て）、Connecting the dots（それを輝かしい未来へ繋ぐ）」と謳う、同校の新たな教育に共感を抱く、現在の小学生の若い保護者世代も多いのではなかろうか。

日出（東京・目黒区。共学校）は、来春2019年から日本大学の準付属校となり、校名を目黒日本大学中学校・高等学校に変更する。この学校改革が公表されて間もない5月初旬に行われた塾対象説明会には、200名近い参加者があり、注目度が高まった。その後、日本大学の問題で人気動向がどうなるか少し心配されたが、その後も志望者は減っていないようだ。この目黒日本大学中高も、今回の改革をきっかけに、「SGH（スーパーグローバルハイスクール）」と「SSH（スーパーサイエンスハイスクール）」への2022年ダブル申請を予定しているという。

聖ドミニコ学園（東京・世田谷区。女子校）は、イマージョンコース、グローバル・スタンダードコースの新たな2コース制を導入し、「21世紀型教育」校をめざす。

このほかにも、横浜富士見丘学園（神奈川・横浜市。女子校）が、来春2019年から共学化。中高とも「理系志向」の男子を迎え入れる方針を打ち出している。

明法（東京・東村山市。男子校）は、来春2019年から高校を共学化。中学は男子校のままだが、高校段階で共学校への環境の変化を歓迎する男子受験生と保護者からは好感を持たれそうだ。

また、7月18日に、浦和ルーテル学院（埼玉・さいたま市。共学校）が、来春2019年から青山学院大学の系属校となる協定を結んだことが公表され、話題を呼んでいる。気になる「大学への系属校推薦入学」については、今回の協定に「2019年度に浦和ルーテル学院小学校に入学し、2030年度に浦和ルーテル学院高等学校を卒業する者が対象となる」と記されており、来春以降の浦和ルーテル学院小学校への入学者が対象とされるとのことだが、それ以前の「経過措置」として、「2020年度入試から2030年度入試までは、一定の募集枠の範囲内で、進学基準を満たす者について、系属校推薦入学経過措置として大学に入学できる」と併記されており、2年後の高校卒業生から「系属校推薦入学」の対象となることも示されている点に注目したい。

意図的に「思考力」を問う出題が増加。 今春は開成中・国語にもそうした出題が！

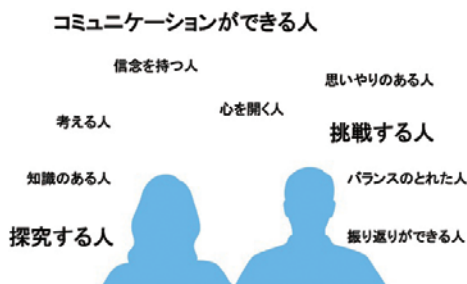
こうした激しい入試改革・学校改革の動きが加速していることは、ちょうど来春2019年の中学受験生（＝現在の小学校6年生）が、「2020年大学入試改革」から5年目の2024年大学入試に挑んでいく学年であることにも関係している。

2020年から、新たな大学入試制度への対応を前提とした次期『学習指導要領』が導入される。さらに新たな「大学入学共通テスト」では、当初4年間は「現状のマークシート式の英語入試と民間英語検定の併用」とされた英語の入試に、2024年からは民間英語検定のスコアが全面的に導入される。その節目となるのが、まさに2024年、現在の小学校6年生が直面する大学入試だ。

つまり、2020年の大学入試改革を節目に、今後「大きく変わろうとする大学入試」の本格的な当事者となるのが、まさに来春2019年の中学受験生だということになる。

来春2019年の中学入試に挑む受験生の世代が、

IBの学習者像



さいたま市立大宮国際中等教育学校の国際バカロレッタで紹介されている10の学習者像。

そうした大きな変化の節目にあることから、中学入試の世界も大きな変化を見せている。それが、この2～3年の中学入試のトピックとして度々伝えられてきた「入試の多様化」だ。

私立中入試の“首都圏最難関”ともいえる開成中が、今春2018年入試の国語の大設問のひとつで、公立中高一貫校の「適性検査問題」と同様の(=大学入学共通テストのサンプル問題にも似た)形式の出題をしてきたことが大きな話題になった。これも「中学入試の多様化=変化」のひとつの形態ともいえるだろう。

また、後に紹介する「新タイプ入試」の導入には踏み切らない私立中であっても、従来の4科目や2科目の入試問題のなかに、「意図的に(今後の大学入試と同じように)『思考力・判断力・表現力を問う』出題を入れてくるケースが増加している。

だとすると受験生と保護者の側は、こうした各私立中が出題に込めた“メッセージ”をしっかりと受け止め、そうした出題に対応できるような力をつけておく必要がある。

私立中の「新タイプ入試」はさらに増加！ 大学入試の変化を中学入試が先取り。

「中学入試の多様化」の具体例は、前回7月1日の「統一合判模試」の入試レポートでも、来春2019年入試で新設される「新タイプ入試」について、6月中旬までの判明分を紹介した。

その後もそうした「新タイプ入試」の新設は続々と公表され、最終的には今春2018年入試から、さらに数10校増加する見通しだ。

従来から中学入試の主流であった(現在でも主流である)「4科目入試」、「2科目入試」以外の、こうした「新タイプ入試」の増加の背景には、やはり「2020年大学入試改革」と、その先の社会で求められる力の変化がある。

相模女子大学中学部〈神奈川県・相模原市。女子校〉

の「プログラミング入試」や、湘南学園〈神奈川県・藤沢市。共学校〉の「湘南学園ESD入試」の新設など、これまでは比較的こうした動きが少なかった神奈川県エリアの私立中にも、それぞれの学校が実践する教育プログラムにつながるユニークな「新タイプ入試」が続々と登場しつつあることは、「中学入試の変化(=多様化)」が、首都圏全域に広がっていることを物語っている。

そうした「新タイプ入試」を導入する各私学が意図するところは、「受験生の能力を測る物差し(評価軸)は4科目・2科目入試に限らない」、「もっと他の評価軸で子どもたちの潜在的な能力や資質を見出せるのではないか」という考え方や仮定による、「新たな評価軸の発見」にあると言っても良い。

そして、そうした新たな評価軸を見出し、子ども(入学してくる生徒)たちの素質や能力に光を当て、さらに中高6年間で、その力を伸ばしていくような教育ができれば、今後大きく変化する大学入試にも十分に対応していけるという考えも、その背景にある。

公立中高一貫校を志望してきた小学生ならば、私立中の「適性検査型入試」を、本番前の力試しやトレーニングとして事前に受験することで「適性検査」本番に向けて役立てることができる。教科をまたいだ合科型の出題や、記述式の出題を得意とする受験生ならば「合科型論述入試」を受ければ、自分の強みを生かせるだろう。



「2020年の大学入試問題」の著者である石川一朗先生を迎え、21世紀型教育機構にも加盟して新たな教育に挑む



2019年入試を勝ち抜く「併願作戦」を立てるヒント ～“合格”を引き寄せる5つのポイント～

ここでは、来春2019年入試で合格をつかむための「ベストな併願作戦を組み立てる」うえでのヒント”を紹介しておこう。以下は第一志望だけではなく、すべての併願校を選んでいくためにも重要なことにほかならない。だからこそ、これから受験校選びをしていくうえで、あらためて意識すべきポイントとして参考にしていただきたい。

(1) 入試本番では少なくとも6校（6回）以上に出願し、合格を得るまで「受け抜く」覚悟を固める。

→今春2018年入試での「一人平均出願校数」は6.7校。実際に中学受験にチャレンジした先輩たちが、それだけ出願しているという経験則を役立てたい。

(2) 上記(1)のことを実行するために、少なくとも10校以上の学校を見学する。

→実際に見学する学校は多いほど良い。なかには最初から受験する学校を絞り込んでいる家庭もあるが、実際に足を運んで、私立中の現在の教育内容や環境、成果を知ること、初めて「通える範囲にこんなに良い私立中があったんだ！」と気がつくケースも毎年非常に多いのである。

(3) 親子で「これだけは譲れない」という学校選択の条件を絞り、それ以外は柔軟に受験校を選ぶ。第2志望校以下は「親の責任で」選び、併願校に加える。

→各家庭で、保護者が大切にしたい価値観や教育方針と、受験生本人が望む（本人に合った）校風や環境の両方を備えた学校を探したい。ただ、万が一のときのために考えておく併願校については、保護者の柔軟な判断と見識で選んでいくべきだろう。

(4) 併願校の難易度を上下幅広く選び、慎重かつ強気の組み合わせを考える。

→難易度として「横一線」になるような併願校の選び方は避けるべき。第1志望校へは思い切ってチャレンジしても良いが、一方ではしっかりと「押さえ」になる学校も選んでおく必要がある。

(5) どんな状態、コンディションでも、親子で「最後まで明るく」受験に挑む気持ちで。

→やはり入試本番では強い気持ちで合格へのカギになる。もし序盤で1校や2校不合格になったとしても、決してくじけてはいけない。最後まで明るく受け抜いた親子は、ほとんどが実りある合格を手にかけていると考えておきたい。



今春4月15日（日）の「統一合判模試」会場保護者会での説明会で「世界の前列に立っている男子を！」と語った保護者の期待を集めた聖学院中。

知識の量は多少不足していたとしても、与えられた課題について、問題中に提供された情報や知識を生かし、その場で考え、自分の言葉で表現することが得意な受験生ならば、「思考力入試」にチャレンジしても良いだろう。

スポーツ、芸術などの習い事や、自分の関心のある事についての研究などに打ち込んできた小学生ならば、この1～2年で少しずつ導入校が増えてきた「自己アピール（プレゼンテーション型）入試」を受けてみることをお勧めしたい。

そして、「新タイプ入試」のなかでも目立って急速に増加してきた「英語入試」は、2年後に迫った「2020年大学入試改革」を節目に、今後大きく変わっていく大学入試とのつながりを象徴するもので

もある。幼少時から英語学習を続けてきた小学生や、英語学習への意欲やモチベーションを持つ小学生ならば、一度は受験してみると良いだろう。

すでに広く知られているように、来春2019年入試からは慶應義塾湘南藤沢中等部（神奈川・藤沢市。共学校）が「国・算・英」の3科目による英語（選択）入試を導入する。これをきっかけに、神奈川県内の他の私学や、首都圏の大学付属校全体に「英語入試」導入の流れが広がっていく可能性がある。

そういう意味で、最近の中学入試は「英語でも受験できる」時代になったといえるだろう。

そして、これらの様々な「新タイプ入試」は、中学入試の世界に多様な評価軸をもたらすことになった。そういう意味で、今後の新たな大学入試に先駆

「統一合判模試」の志望校は、“できるだけ多く”登録することが合格への秘訣！ ～今年度から変わった登録システムを生かして、1校でも多くの入試の合格可能性を探ろう～

この「統一合判模試」を受験するにあたっては、合格判定の対象にする志望校を各自に選んでいただいている。この「志望校登録」システムは、昨年度までは「一人最大8校(8入試)」まで選んで登録することができたが、今年度からは、実質的にさらに多くの学校(最大6校の学校)を志望校登録して、それぞれ最大15回の入試まで結果が見られるようになった。

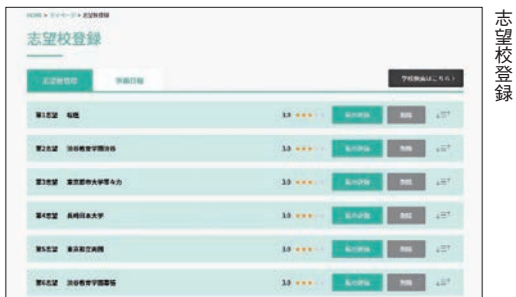
実際の入試本番でも、一人7校近く出願しているわけだから、その7校を選ぶためには、事前にもっと多くの学校(入試)を検討しておく必要がある。

(1) 第1志望校(=チャレンジ校)を複数選び、合格の可能性を比較して探る。

→この9月までに第1志望校が固まっている受験生も多いと思うが、もし他にもチャレンジしたい学校(入試)があるならば、そうした学校も志望校登録をして、合格の可能性を探ってみることが、受験勉強の励みにもなる。

(2) 第2志望校(=実力相応校)も複数選び、どのような併願作戦がベストかを探っていく。

→受験生によっては、第1志望校(=チャレンジ校)、第2志望校(=実力相応校)、押さえ校(=滑り止め校)の組み合わせの校数が違ってくると、それで良い。ただ、第1志望校に続く併願校を選び出すことの方が、実際にはかえって難しい。それらの学校への合格可能性は、何度でも何校でもしっかりと探っておきたい。



志望校登録

(3) 押さえ校(=滑り止め校)も複数選び、万が一の場合にも心配ないベストの併願作戦を組み立てる。

→これも第2志望校(=実力相応校)と同様ではあるが、受験生本人にとってベストな併願校を慎重に探っておきたい。合格の可能性が高いと判定されたり、志望校内の順位が高ければ、それが本人にとっての励みや自信にもなることは当然のことだ。

(4) 併願校の難易度を上下幅広く選び、慎重かつ強気の組み合わせを考える。

→前のページのコラムの(4)と同様。多くの志望校を登録し、合格判定結果を受け止めることで、第1志望校(=チャレンジ校)については、「目標(合格)までの距離や課題」を知るための参考にして、一方で他の併願校については、合格判定結果を、その時点で受験生本人が「ここまでは大丈夫!」と思えるような、自信や励みにつながるように活用すべきだ。

そのためにも、志望校登録は「1校でも多く登録(記入)する」ことが、実は合格を勝ち取るための、意外なコツになっているということを強調しておきたい。

「統一合判模試」の合格判定では、最大6校まで選べる志望校について、それぞれ最大15回の入試まで結果が見られるので「できるだけ多くの志望校(入試)を登録する」ことが合格への手がかりになる!

けて“変化”、“多様化”し、その方向性をリードする存在になっているという見方もできる。

そこで受験生は自分の強みを発揮し、一方の私立中は従来の4科目・2科目入試では測り切れなかった小学生の潜在的な資質や才能、伸びしろを見出して迎え入れることができれば、学校選び(受験校選び)という観点でも、とても良いマッチングができたことになる。

もちろん、多くの中学受験生にとっては、これまでに受験勉強をしてきた4科目・2科目の入試がメインの目標になることは変わらない。それでも、もし「この入試ならば、自分の強みが生かせるかも?」と思える新タイプ入試を見つけたならば、併願作戦のなかで、そうした入試にチャレンジしてみることも、来春2019年入試で上手く合格をつかむためのコツとなることもお伝えしておこう。